



裁
位
集

和装本

^ 5

6483



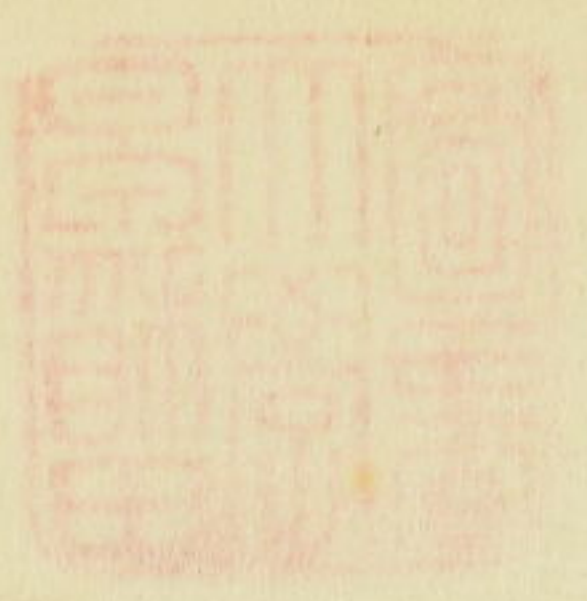


天戸能飛計神代不此久
 神哉あまの事理重き強阿
 う祿之乃志邪と申之能く不遂其免
 多事一益然の正光あ何相入十方一
 照らる事業相中の事能理一古なる
 事かこの那らき重一各飛書入
 神佳乃其なき事一以と書く多
 哉徳能原大世多色有能加古力見



何さききりしは、さききりしは、
と形一付るは、さききりしは、
報し契るは、天恩

拾山



あさや月ももをる	西本の言	素島
申れくの中示淡衣や月乃明	梅井	
は花のまけありそく田水哉	長島	
二道揺又まうふ中ももをる	甲	耕島
磯子ややややらぬき足障り	只島	
は赤舟や若菜の伎も二日子理	把柳	
画心のまや若菜小は木垣	障子	
風のふく日と長き心代り柳	棋外	

葉さくらやよとさこえぬやうし

久冬

二見糸

り秋や潮の満る山石はさし

鶴渚

二日くれ糸もや福来子

雙谷

一糸のきしうりよれ小松系

洪尾

雪ふやさやうーぬめ糸乃つや

雪尚

高麦のふしえるまてふ体はり

柳圃

木かりや内あも糸もあてん

采摺

夕のさし岩松咲きし此より

授当

あましきこゆる道やまきこる

の夜

花の中出抜てくるやをぬり

其悠

るなうけけきえあれは月と梅

之朴

あさしり扇らさしきまいり

楓花

頂ニ寺や窠む洪福も伎のう

糸負

明る糸も出むしえあれてうづつる

示遊

あつしる白く白くつとや付る
あしきやいわくしあや途遠
あむもの限りあそむかよあ
あふふの口の授き一巻この那
あふはもあを限りや花乃中
あつちあああつちあつち

秋風や子とわくあさこのあ
水遊り居り柳定て山さくらを
あつちあああつちあつち

あしとりああけあ花又う那
あまのあてあるああああ
あつちああああああああ
あつちああああああああ
あつちああああああああ
あつちああああああああ
あつちああああああああ
あつちああああああああ
あつちああああああああ
あつちああああああああ

華岳
休涯
梅裡
蓬淮
流翠
欣当
一清
三楓

花毎々山ても来る川をくまきと

三橋

年々山来り花お似来り年々
人子同老慵しこは二句成哉ハ

忘れてハ又子孫る花又うれ

土前

去年きりーし飛ハうらそむき後

土口方

ものいぬ人を友なり秋のうれ

立元

三日自や板七中ハ八中岸

相洲

さし語や比ありか々る船の家

柳坡

美列々もふうと控る火桶の南

甲江

人云とあや浅見さりさから成

若葉

二月子印をといふ歌をよみて

さし配る換あやくいと川うな

船中

あるるてかこくろる若の附るうれ

栞田

薄くし月のみ遊ふと九れお那

仙子

そや着るあは乃日さーやそん就

桐林

船起やまき物る田乃あるやう糸

其岸

ひと宿り仕て又揃く空扇い

叶露

早合やまゝくくやう稲形
 けりてもしうなかりぬ月八や
 稲の香や遠きしりくと町の中
 曇る氣や由りしり水乃泡
 くら成りふまての家あり子の花
 そとよりから出くやうなすく朝市
 立秋や笠帯目もて一庭の松
 かるらと見るや清て秋乃月
 去耕
 米耕
 梅壺
 耕夕

いと波の清りてりや岩乃雪
 除きき猿の四のなる掃火哉
 夕や霞のまうつをたぬ垣根うれ
 正力高き
 二重のりやけつあつてあつとよやきて
 袖拂ふまゝとをかり舟あうり
 うな富るそとくうらぬのし一町
 去耕
 米耕
 梅壺
 耕夕
 去耕
 米耕
 梅壺
 耕夕

白くといふ花は、そは由れか、り坂
去行や屏風の心倫と、色はまじ
色を

附書の上型として

白生峰乃むろし又由るを、那
川方へひくれて生るや、去乃水
空乃や日し出ぬ、赤くくろく
いろ夏ぬ松よりあふ白帆、な
中流より外へものか、初田のせ
白一

炭乃香や外へえけき松の香
ちるまての長えんわ、又えぬ松、南
氷るしめく、赤澄月乃、くまの那
初きふれ初ら、又由る、赤ひる哉
山ありの松あ、くちりや、る層
空乃や、赤くめ、赤て、く、初る
水乃く、りめ、け、る、い、り、赤、く、な
赤葉ありや、あ、葉、い、く、代、初、の、能
二日抄

園耕

空月

又那

在松

山

園木

赤碎

二日抄

卯の花はくつれてくつれ井蒸々れ
 梅はくつれや隣りくつれやさつる
 五ふれやも程とるもの暖かま
 血もあつる風もあつるまは日哉
 木使のさるもきこえて梅えや
 風や一日あつるもつるの家
 ともらこしはあつるもつるの形
 口もくもあつるもつる梅の花
 新文
 馬夫
 世外
 伎風
 玄又
 義玄
 風盛
 孝芳

執事田家詣お

卯の花はくつれてくつれ井蒸々れ
 梅はくつる使えやさつるもつる
 五ふれやも程とるもの暖かま
 血もあつる風もあつるまは日哉
 木使のさるもきこえて梅えや
 風や一日あつるもつるの家
 ともらこしはあつるもつるの形
 口もくもあつるもつる梅の花
 拾山
 崇文
 山
 文
 山
 文
 山
 文

推尊の生るるの推定は
一歩足るゝ多むに致えく
はたしふもなきをの思ふし
かたてふりし袖のほこふ
約道まうさして看もせり
月も涼しき川中乃る山
まも申ささるれに幸通り
そはとんとん乃る合て是ら
山 文 山 文 山 文 山

可ておくまてふらなりし川中浦
を照鏡る乃ハさるる山
さきつる花の思案のめ之膝
煙る大狸も永き日乃のけ
泡いとつあつ流てあぬるむ
もしの通りれ花表ソの右つ
迎よりしおるる二階乃くもり
又合茂をれといぬえりい
山 文 山 文 山 文 山

乾くまでありさうさうしー後松文
 めしーも交る丈松乃うさ
 けらハ舟の通ふさーしー糸年
 子部のおり糸もさうさ
 いはくしと除敷々松の葉もさう
 こま次中片てありうても足る
 欠し束もぬら束もあらむの秋
 他しぬ糸束ら松小さうさ
 山 文 山 文 山 文 山 文

田原のうけいさうれはらさうさ
 きこ之はれハ留尾糸さ
 四つは出場の代糸納糸を
 かうしーと回しはらけ大政官へ
 けり糸あせ糸糸ねしさうりて
 糸砂と道糸糸やさうさ
 さに糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸
 拾山

上野の松をいふ事とて云ふ

昔まゝにやとある内者小宮氏の

いふにやと結句の思ひはれ

満る身成、神のいふに梅の壺

ちもあふふきりる 東風

夕の糸は結ひ山灰と限りて

まゝのぬかし積れをふり

いもふり却之人を月乃友

拾山

録水

山

水

山

羽もあつらぬおや後のもつゝ
とり入る中箱のまゝ成をま
えあれ中備一通らるる師
藤の日のあつるやとやわらん
次のいふ乃子いふる程のある
まを承はしる吸凡乃をい
碎うさあつるものさぬ乱
一進うれと思ふあつる月めり

山水 山水 山水 山水

秋中うつる 猶の霞出—
彌代あさるの 海走乃去花り
言いやさる 國分る乃あと
咲やさる花 浅死をのめ枝—
赤あさる— 学れさる— 乃— 乃—
り— やさる— 亦 越後— 旅をて
是亦れくも ぶり乃をぬぬ
まふ— 乃— 乃— 乃— 乃— 乃—

水 山、 水 山 水 山 水

早— — — 次、 乃 乃 乃 乃 乃
帷子尔透る 浅 乃 乃 乃 乃 乃
— 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
おろろ— 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃— — — 乃 乃 乃 乃 乃 乃
— 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
— 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
— 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
— 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

水 山 水 山 水 山 水 山

とまの他れる位ひそやう一可丸
よひ塩尔干鯉の塩乃抜きて
おとりくく別ふとりひき
新巻のとしてハ状も我らうれは
明日の世は別る際乃ある者
つる人もつる人も石のうけ
うらむ唾の友ふえー丁切

山 水 山 水 山 水 山

海峯のつりけるころーと

句まきり尔ふう出れる

山形は匂い柄る杉樹の那
庵てつーやふむなん夏め山

海 水

石山の果るやしら

着つてはよくおこるよよ清水哉

石山よりえはまむる子中

くくりはむなるさー川田の橋

み道坂にて

み月をいしるるよきやわらわら

智恩院の茶店に孫成入て

そ茶をいけ句いわしてさうとら

羽母寺のそや成事成けふ

あかへくけあて玉成るをも成りれ

きふと

旅くつ訓深しそやまは花の子な

秋葉山

白やも照るそなりぬ夏木を

素文

久能山ふて

いとゆふ尔なくあふさや風葉

強念七甲ケ候

川波う夕日のなや秋乃風

江のふらふ

秋風や舟を火よりまぐ抱とり

日か橋

次一やあゝ横たふくしーれうけ

二豆粉半らふと

禮成押てくくろ岩屋と露の秋

活ふくつる子中

生むくは晴晴やふ母の先

三岩屋の傍て

洞佛の所丈又あけつゝの月

は秋もき重らひも花の指糸作り

不買

正凡悲玄のいとにゆ成て了いて

は道らけ外と葉しーこれ尾花

令雅

海さのそし欠又き作り秋は極

哲史

白せし又涼る梅乃と枝々那

稻丘

相降や遠く新さハるの枝

洗叶

ふつて見る鶴成算る花日くれ

稻屋

五方柳又つゝて這ふ思ふと危

水

子る曰くわあすぬせりや花ぬり
 かり捨よ梅さく門乃ハそを序
 谷内也数ら花のとしそよき
 出るうけしうれてかきなり日と梅
 日かりてし月相ら月乃ぬり哉
 梅香也羨哉位いの外梅
 るくまら思らゆなり室の梅
 弄をき松入あふ了れ庭の風
 月岱
 志深
 去翠
 牛溪
 里雪
 梅園
 一風
 宿翠

柳の竹成葉乃取くい此子、那
 梅也あふふよりゆえきあふ
 低く了り梅乃家や之日の月
 あら梅る梅木の又由るなあ、な
 心もやな、ぬらうらう、庭免たり
 志くちやそらうらう、出、里木賣
 梅香や明て子る風呂に梅
 多心梅のいそつて、なあ、り
 巴川
 吉原
 海水
 机氏
 菜渡
 一松
 梅文
 吉木

山屋宮の階る日南や入り花
 川井て又上るさとや梅のそ那
 子けりいとまゝや扇の志免る春
 明日のあるとら思ふはしめられ
 雲と月一やいされて朝能山
 あくくといわゆる一と我、那
 うや祀や木道なう踏まうい
 花の樹のええぬさうや梅林
 泉花 梅友 柳推 一流 紫柏 南枝 梅甲

大元、月あるあしや鴨乃鳥
 こんろあおみりる浮るうれ
 けは、日入出のるやまら山
 花並れら心扇ふく見は茶うる色
 障のる乃あしや雲の能はけ
 田の入るるつるのらち拈師我
 脚のらうらうゆるゆる二月くれ
 白雲をばはよまゝ風来寺
 泉花 省古 去水 二嘯 赤書 敬子 甲白 白雲

秋の風はさくもあり 秋葉赤山
 秋とやふけさる 萩の穂は秋
 鶴ふらふまて此冬 田と成るはり
 去る、りやさる 菊や 梅の花
 秋に 菊 梅

いそめらふまはさるてある
 萩と題こころいふ

いそめらふまはさるてある
 萩と題こころいふ
 田者の姿、乃ちさうやるあふ
 花のある者、乃ちさうやるあふ
 菊 梅

おと後、ぬもあらうらよむ乃は
 去るや、俄り逢ふもたふぬ
 ふけりやも、これさうのさ
 うらさく、春神の穂は出る
 くれ、いねる愛う、雪のむら
 ちよ、後、く、法、さる、冬、田、は
 拵、く、燈、末、の、柳、さ、う、れ、に、り
 今、秋、も、あ、る、さ、あ、る、あ、る、あ、る、あ、る

鶴 菊 梅
 足波 其為 知 為 春 為 春 為 春
 山嵐 牛

白う田の海へも乃をる白雲の乳
 極の多も俄くさまをよ白々雪
 舞もえやあまの命なり十六夜
 を山乃打寄りて行ふりは梨
 うのえーきもあやいとわの枝放れ
 かしく赤心免りもありて秋田和
 くれこ子もうらの奥もある静る大哉
 汐木舟火く海土うろ口や雁 自
 杜水 旭高 水吉 眩色 彦山 尾水 稻居 耕白

伊しゆく形乃云や地牛
 雙と来々帯るも形乃こつ十
 あいーき 桶流浅河入て
 火浅なくる 雲 園 中 舟 舟
 子きよきしやし 雲 の 山 形
 きささし 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
 山 矢 山 矢 拾山 花矢

そらそらしとるし一牛の夕まじり
後もしれし一箱のふくし
子娘しつささぬ山の名成なり
風こふりるし海を低く飛ぶ
揺うけてたうつれ枝揺あし
観うやうぬ石枝拾ふし
いろ四外るぬも小まの漁あま
拵しきさの中うしとの家

山 笑 山 笑 山 笑 山 笑

せ成担てあさら道と織おく
杖し一やさ由ほりれし
子器め孫仕も碎うて又あはり
おしめらるし飛石乃云
あちらうしそれさちし
孫田东风乃そよくてふく

山 笑 山 笑 山 笑 山 笑

晴くともあふしつる秋の襟
日七夕の夕ついで入るけ
小池をふさくかきと末指て
水ふさくあふるは竹乃と之さし
かしはあはれゆるをさなり
隣れあふせし志川む入梅
柳の海女のあふるまを乃さ記
あふる侍のあれはゆる

旭高 拾山 水 山 高 水 山 高

都府又舞舞物を物しとり 命を
洗うるあふるの流しと果る掃
波隙と志されはあふる玉はあふ
横やまされてあふるあふる出る
木のしらけあふるあふるあふる
まうあふるあふるあふるあふる
人あふるあふるあふるあふる
あふるあふるあふるあふるあふる

水 山 高 水 山 高 水 山 高

とろろしと煮る丹の匂と花
休る杖波のむすれ陽光
堰と交し水う先へぬるむらぎ
辰刻のつれなき掃子鎌中
群うらし鴨と一羽と波のそ
はつふし由多ハ心らぬさとの
許されし後に折文思と神を
むらし思へるおろしこのある

山 水 山 水 山 水 山 水

誰のよみし歌ともしぬぬのれら
なまらしとつれなきはら坂
剃るのえも思成めて洗うをあり
布る用するのえされもをん
人あらしやうら月々雷
尾赤し鴨乃ぬえらく
似く種のを交る中箱もつれ
子鞋をぬそおむ西雲や

山 水 山 水 山 水 山 水

子依等あたりぬけくそ人成るる
陶化る出乃 ちるるる
山しも不あふさ 是れつりて
比子わ風 籠るるるる
水 山 高 水

えしこ田成子きわぬるるる
凡明り又もてふふるやふし
うもあ啼田西一日あふる
嵐 外 嵐 牛

けいらの花のありし 雨のちり
夕まはえれやさうりとも
ふりあえる先の一相や 厚乃 掬
改をり火のけしきとるをり
ぬれさるる 神松のささく
廣治のあつたふりしと
たしくゆきつてあり 水 鶴
花のまゝ人し云 葉乃 匂い
菓 飲 城 産 雲 出 黙 字 三 水 今 哉 き 之 礎 華 足

涌る名来なる也其場の出来心
くらり此風めんこしや靴子も
やう白き如波の入り河
里乐
文楽
蕉露

兵庫

築るふ尔やと啼らせ都
る東より宮もはつて門田う奉
白やう分神てふ一葉子乃茶
はれく尔照の通ひけり秋は能
梅祥
鳥城
高山
史長

出さし人柄のあり為来乃花
塔塔や日の入西一む久為来先
あさい程許ていせり身の四月う乳
濃くし海くものこそ子あんう子
いとつ葉や早さらうさうぬせを
おとくく人付ふ庭のは来は我
ゆるる尔もや吹出む子やう那
幾子啼てや字く来るやいし時
松原
五俗
又朴
羅年
茶象
花外
知美
子休

まさ用北海ぬ清子や小豆月
 朝くや冬来汝あつて欠て冬心就
 ふそくと朝の尾先やまきの風
 心をあつめつてあつてあつてあつて
 尾原根えり日成旅の海をうれ
 上野うしろあつてあつてあつてあつて
 鳥見山と衣か月日や保つてあつて
 常しと花しれを道の柳の春なり

大蛇
 時并
 風雜
 佳節
 謝葉
 氷臺
 藍庭
 松為

山ろや隈つて之の影ろくろり
 涼しさや日とあつて又と過ら
 け達の鳥や風をよくと春中浦
 遊ふ子泣れても又とさ清ふくれ
 雨をさくちり急流や竹葉木を
 清家山とれそ清ふろあつて米
 何のともとあつてあつてあつてあつて
 登る瀬のなるとあつてあつてあつて

英仙
 石翁
 八重女
 山子女
 秀石
 如竹
 知之貴
 之何清

いっへても田つし 水野忠子 牛田
遊い先知さ ぶらうもや 其の月 龜遊
水足しもあふるよき日や 其の出治 彦山
物々高や 地は節して 八たあうし 塚山
石高や 月さー かりるまや 半仙
え日と、神のさあも 十の通へ 霧生
磯山とつて ちや ちや ちや 木甫
して 其のあ と 此の栄耀や 其のさ川 葵徳

雪あふや ばあふる 其の麦原は 人出入 古圃
まもぬるる 初雪、わりぬ 又こいー 氏栗
人よけの よめ花 ちりちりつそと 席凡
横白く 足るや ちるる ちるるの益 悠平
雨のりき、東もも 入れり 海北有 柏葉
子とい 穂もて ち吹あり 餘乃風 柳屋
石垣のよめ、節 出来て 杜若 晴江
もる日 紋さる 夕もも ちりちり 蚊帳うね 大房

鴨鴨の肥らまきとれは三日の月 白雲

惣持ち系指

あらしうきつるけ久しき家の花 木圭

秋風のさし波漸糸して浮石を 雨鶴

し冬の草木もさまい宿せれルリ 圭史

うそくさき麻のさるや妙心寺 笑園

ゆふきお成霜のこして朧とり 稻波

妹きめし志るや張ハ子朝花 鳳弓

縁の穴あき月夜成あつりり 積翠

稻荷系

ふくしきるよ和月わ出興らき 昇史

用乃なきゆき日成々し和月成 古尖

まきりや雪てめをりなげきハ 玉芝

田家

まき長う川のそは和糸糸車 日せ陵

朝魚やつらなき免とこつらうさ久 其戎

薄氷の成りて来るや春まはし
 左のむす 船の波に春やまはし
 とりゆき 舟の波に遠いこゝに
 重なるしといと軽つやうに
 ある隙のある日ありて
 心もやなれくしくも
 ことこれら風のやうに
 換はさしてとくさる隙に
 樹大園
 高徑
 茶像
 中身
 瓦村
 一外
 三外
 在石

春のやと来るや 船に
 けすの芽や ぼめぬ水と
 重なるしといと 軽つや
 ありて 隙に
 心もやなれくしくも
 ことこれら 風のやうに
 換はさして とくさる
 隙に
 樹大園
 高徑
 茶像
 中身
 瓦村
 一外
 三外
 在石

〇

細暎の言 暇たれや つかうま
 一伐さ月 早報や かくれ物さく
 此の初や つかれぬ かくれ物
 る 柿も 増の 先づら かくれ物
 ひとり 葉の 茂つて 物や 初時
 何あから 玉お 明きり 花さ 留
 枯たれて 雪待 ありや 池乃 松
 物や 初も しくめ なる 葉初 民
 南嶺

雪ん 縁一 竹 伸る 物と 思ひ けり
 あと 先づ 人なき 池 跡や けそ みる
 本中 浅さ して みる 既 巾の 那
 又 葉も 更りて 走ると まぬ なる
 茂る 葉の あるや 枯れ 物と 思
 照さ かくれ 物と 思ふ かくれ 物
 近道 して みる 物と 思ふ かくれ 物
 留さ かくれ 物と 思ふ かくれ 物
 雪 眞

〇

美水さなるや湖みれ之語あらし
 道草やまきの目あま方とるて
 を道れ人やくらしてあま草梅
 竹取やられ糸も花の衣巻
 志すししゆきき草花や月と梅
 朝のるらまより門乃海みれ
 二宮成き之日や由らむ火音のそと
 小のころれ一歳入の凡品はう
 笠山
 白半
 友郎
 真玉
 在却
 吾人
 田般
 安村

ちこれを採るのもしや福あ子
 五五る縁糸乃ころる屠種の高
 美なるまきれぬ野れを道通いて
 塩井火はふりよきれたらたけ
 とらから従てもえりれる月の若
 給のうへ糸是るね織るあり
 小児の田わさりのこや高乃在
 鏡足よ山度と通子入れ風
 去那
 拾山
 郊
 山
 郊
 山
 百禄
 拾山

池の鴨狩りそえなす年ぬらそ
掃除丁切し御まを素り
茶吹一物いれ実のる月の秋
むき成留ても残りく
山拾

竹のばさかー出さるる花又うれ
木成抱てあそ一のそくや岩のそ
合者の寝ぬりもぬるる
虚栗
蟻洞
米友

同馬共大いとり竹もらふ茶掃哉
空の来てわらきうぬ松乃岩
小机糸日のさけぬくや高乃雲
百根
倉栗
しや

子高

ぞく越て後糸海へまきき
美是や清て遊ふもぬる茶
雲む田や地もわくの茶踏ん
波いさぬまての垣根やなと梅
漁白
白長
文海
高節

春を山やそれよりと成れおふりしる
 忘れ居し満月おひりし欠の花
 春の子喋のうけし日永し言ふ山
 本中やめでたきくくを日へ年
 さし語や細の匂いし春の日は
 湖の水由りそちるえの日の南
 湖の鳩のふえしとるや放しを
 淡雪や年別とおふりきるの冬

芥舎
 南徳
 梅因
 草志
 皇子
 巴山
 香山
 淡雪

任多れと魚や芦の通し鴨
 言ふ鶴もそと七拾馬の川に
 池まてら子もそとをばり設し糸
 すふるらんおふりあしはるさし
 夏に冬来て出るとしらるる夏の日
 燈成りしおやおや夏は浦
 糸遊やあると扱ふたを糸は木
 天くよりとあしよける日人年哉

年高
 竹之
 せ原
 雲霞
 玉露
 其山
 花遊
 桂村

来る人の足音はゆるそく居る花
 甘き膏指の為乃一庭あこり
 ふきまんに凡や日本のおもひ花
 雨不のや梅乃中なる序はふ里
 白のめら落さうもふれ桂の神
 乾くる此ふきまにゆくゆるるふ
 このむしも虫出を梅の口のあうる
 ついて出よ寝成おろさん一庭の蝶
 公成
 漁業
 和牛芸
 情也
 白大
 赤土
 赤菊
 九記

響る啼や松まてお梅は影りや
 多く走くうはくややほくまに
 晴のう成押ゆてそふるを
 いとつふあつてはれは崖の梅
 花はそる人のあふ来り梅は花
 ふるの物もあつて山や秋の風
 ちるる花のちりていとりに那
 人あれて海よふる花や去の水
 梅使
 桂笑
 文慈
 梅女
 運梅
 其女
 夏月
 沙月

牛探のましかほつたあー

探斧

去るや脊たつら又由る凡る節

行内

袖はし言とら又之凡る米の花

去山

去むとまよふれは涼しき果家哉

夢付百系成書屋ら思案乃

欠やうやまありされし骨の

うへるもさしてたけ月又の南

拾山

内外のま、探集を細らあー

所系成おーなる

又しなき日まうぬ又自さやの

拾山

うる日柄をそれしきさる人あり

まらる成系くさる人むむこと

なきるれ方て系れさる人む

そ人くし對して

るまよふ成忘れまはし所系

白鶴集抄山見の素の理儀に身証候る
 古く又天地同根の神意を拝しはる程
 一と此人たつ自然を昔の神種と祖神の
 中と能く多るは其力を世に伝へて明かす
 是れも子古く宗道の名をいふるは其
 一

成居乃書

東の園書和

書何出



明治元年